

学生の「つどいの広場」における その活動と実施調査の報告

青山 雅哉・小川 純子・島田 稲子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Report on Activity and the Enforcement Survey by Students in “Tudo-no-Hiroba”

Masaya Aoyama・Sumiko Ogawa・Touko Shimada

Naragakuen University Narabunka Women's College

幼児教育における音楽学習の目的の一つとして、子どもたちの活動の場において、音楽を用いてより良い環境の場を設定することのできる力を獲得していくことがある。

昨年度末、本学の「音楽の基礎」の授業終了後、学生達は音楽を用いて「つどいの広場」で子どもたちへの活動を行った。授業の枠組みを超えた活動とはなるが、学生の実習開始までの期間がまだ半年先であり、子どもたちに何らかの接点を持って学習意欲向上を図ることがこの活動を始めるきっかけとなっている。さらに、その指導と活動の観察をとおして、これまで獲得した力とこれから獲得すべき力を見つけ出し、「環境の場の設定」をする力に対して、今後の授業に反映させていくことも授業担当者としての大きな目的でもあった。本稿はこの活動の観察や学生のアンケート等による調査を検証し、報告するものである。

キーワード：幼児音楽、音楽活動、音楽教育

1. はじめに

本学学生の音楽的初心者達は、入学当初のアンケートにより入学者の60%程度存在している。幼児教育学科の学生にとって音楽の学習は必須となるものであるが、本学ではそれを2年間の学習により修得することになっている。こうした、初心者の多い中での最初の1年間は、主に音楽の基礎的理論やピアノの基礎を中心として学生達個々に対応した音楽的スキル向上をめざす授業展開を行っている。次の段階にあたる「音楽の基礎Ⅱ」その他の音楽授業により、目指す資格に適応した能力を獲得していくことになる。今回の学生による活動は、1年次終了時における活動であり、そのため音楽的能力だけではなく様々な能力において未だ学習途上の段階であることを前提としなければならない。今回の活動も

学生にとって初めて行うことから、試行的活動ともいえるものである。

活動の場は、奈良市子育て支援事業による近隣の子育て中の母子が集まる「つどいの広場」「ちびっこ広場」で行われたものである。「つどいの広場」は参加の少ない日には4、5組から多い日には10～15組程度の母親とその子どもたちが参加している。「ちびっこ広場」は「つどいの広場」のイベントの場として位置づけられたもので、月に2回開催されおよそ15～30組の母子の参加となっている。

学生達は各日時に設定した時間帯で活動を行うことにした。学生はクラスの中でグループをつくり、グループ毎に事前の準備のための計画と練習への時間を予め設定して活動にあたらせている。

2. 学生の活動の記録

2.1 準備

◎つどい・ちびっこ広場

(1) 本学では音楽の指導に、卒業までの学習内容を一覧表にした独自のグレード表を使用しているが、右記の発表記録を入れたものに改訂をし予定を立てた。

場所	内容曲目	日時	印
----	------	----	---

(2) 1回生該当クラスの学生に、後期最初の授業でこの実践を行うことを説明した。以下にその説明内容を示す。

ア、時期…1回生の1、2月に実施する。

イ、場所…つどいの広場又はちびっこ広場

ウ、目的…人前でのピアノ演奏や童謡指導の経験、幼児と共に活動する体験が足りない部分を、実践体験で補う。また、音楽の力と共にコミュニケーション力も養う。

エ、方法…各自でグループを組み、場所と大まかな内容を考え実践記録用紙に記入をする。発表の一週間前にはリハーサルとして、教員の前で実施し指導を受ける。さらに、以下の4点に考慮する。

- ・幼児の年齢は1歳～3歳が多い
- ・ピアノ伴奏での童謡が入っている（手遊びも可）
- ・実習時と同様の身だしなみで行う
- ・つどいの広場にはピアノがないため、キーボードで行う

(3) 補足:幼少時にピアノ経験がないものが短期間に力を付けようとしたとき、以下の点が弱点となる。

- ・初見がきかない（読譜力が弱い）
- ・人前でピアノを弾く機会が少なく、臨機応変に対応出来ない
- ・ピアノに気をとられ大きな声で歌えず、幼児の様子を窺う余裕がない

この点がこの活動で強化されていくことも意図した目的である。また、精神的な負担があれば、2回生の夏休みでも良いとしたが、希望を聞くと、全員1、2月での実施を希望した。しかしその一方で、できると自信を持っている学生は少なく不安を口にする学生が多かった。このことから、ピアノに対しては自信がなく不安ではあるが、幼児とふれあい直接関わりたい、という気持ちを多くの学生が強く持つ

ていると感じた。また、ちびっこ広場での実践希望は3グループで、いずれも楽器の演奏が得意な学生達であった。

2.2 内容

下記の表1は、学生が提出したグループ（C組8グループ、D組12グループ）の実践内容をまとめたものである。

表1 実践記録

2014音楽の基礎 ちびっこつどいの広場 実践記録 (I 回生CD組)							
ア、導入→絵本・紙芝居→それにあった歌				イ、導入→歌→歌に合った絵本			
ウ、導入→歌(ペープサート・紙芝居付き)				エ、導入→絵本(ペープサート付き)			
オ、導入→手遊び・ストレッチ・ペープサート→リズム体操							
S1、導入→手遊び4つ→楽器演奏→歌				S2、導入→ペープサート(替え歌4つ)→紙芝居			
回数	日 場所	クラス	パターン	内容	クラス	パターン	内容
1	1/15 木・つ	C④	ア	はらぺこあおむし(絵本)→ちょうちょ(歌・高さの変化有り) ちょうちょのお面	D⑩	ア	みんなでボン(紙芝居)→しあわせなら手をたたこう(手遊び・3番)
2	1/19 月・つ	C⑩	ウ	グーチョキパー(手遊び)→あめふりくまのこ(紙芝居・歌)			
3	1/22 木・ち	C⑥	ア	挨拶→おたんじょうび(絵本)→ハッピーバースデー・ゆきや こんこ(クラ・マリンバ・ピアノ)			
4	1/26 月・つ	C②	オ	手をたたきましよう(手遊び)→ストレッチ→行進曲(リズム体操) 歩く・止まる・スキップ	D④	イ	やおやのお店(野菜のペープサート)→おやおやおやさい (絵本)
5	1/29 木・つ	C⑨	ウ	きのこ(自己紹介)→どんな色が好き(歌)→おはようクレヨン (ペープサート劇)テーブルクロス、お皿、トマト、レタス、ト ースト・ミルク・バター・マーマレード			
6	2/2 月・つ				D⑪	エ	はじまるよ(手遊び)→びーまんまんのいただきますっていえ るかな?(絵本・ペープサート)
7	2/5 木・つ	C③	イ	はじまるよ(挨拶)→手をたたきましよう(手遊び)テンポを変 えて→金魚がにげた(絵本)	D⑤	ウ	むすんでひらいて(手遊び)→おぼけなんてないさ(歌・ペ ープサート)
8	2/24 火・つ	D③	ア	自己紹介→導入のお話→豆の数えうた(絵本)→豆まき(歌) →鬼の折り紙	D①	ア	頭肩ひざボン(手遊び)→みつばちとどろぼう(仕掛け絵本) →ぶんぶんぶん(歌・ペープサート)
9	2/12 木・ち	C⑤	S1	むすんでひらいて(手遊び)→手をたたきましよう(手遊び)→ やきいもグーチョキパー(じゃんけん遊び)→アイアイ(身体を 動かす)→星に願いを(マリンバ2重奏)→にんげんっていい な(歌)	D⑥	S2	大切なこと(ペープサート)手をたたきましよう・おべんとう・さ よならのうた・はをみがましよう(替え歌)→くれよんさんの けんか(紙芝居)
10	2/16 月・つ	D⑦	ア	自己紹介→(絵本・ペープサート)→歯をみがましよう (歌)	D⑧	オ	風船のペープサート(もも・ピーマン・パイナップル)→動物親 子体操
11	2/19 木・つ	C①	ウ	はじまるよ(挨拶)→むすんでひらいて3番(手遊び)→かわい いかくれんぼ(歌・ペープサート)ひよこ・すずめ・こいぬ	D⑫	ア	はらぺこあおむし(大型絵本)→キャベツの中から(手遊び)
12	2/23 月・つ	C⑧	ア	キャベツの中から(手遊び)→クレヨンくんのけんか(紙芝居) →どんな色が好き(歌)	D⑨	オ	むすんでひらいて(手遊び)テンポを変える→三ツ矢サイダー (手遊び)
13	2/25 水・つ	C⑦	オ	挨拶→むすんでひらいて(手遊び)→さんぼ(体操)	D②	ア	かくれんぼ動物園(絵本)→パンダ・うさぎ・コアラ(歌・踊り)

2.3 結果と課題

(1) 結果

内容を整理すると、実施した曲目の違いはあっても、大きくは以下のように分けられる。

- ア 導入→絵本・紙芝居→それにあった歌…………… 9グループ
- イ 導入→歌→歌に合った絵本…………… 2グループ
- ウ 導入→歌（ペープサート・紙芝居付き）…………… 4グループ
- エ 導入→絵本（ペープサート付き）…………… 1グループ
- オ 導入→手遊び・ストレッチ・ペープサート→リズム体操…………… 3グループ
- S1 導入→手遊び4つ→楽器演奏→歌…………… 1グループ
- S2 導入→ペープサート（替え歌4つ）→紙芝居…………… 1グループ

（S1とS2は、曲目も多く多様な発表をしたグループ）

導入部分ではどの学生も緊張のため表情が固く声が小さく笑顔がなく、つどいの広場を担当する講師の助けを借りる事が多かった。内容としては、「はじまるよったらはじまるよ」などの手遊びが多かったが、なかには元気に「〇〇おねえさんです！」と自己紹介をするグループもあった。

ア、イは、絵本と歌の順序が違うだけで内容としては同じである。ただ、先に絵本を読んだ方が学生も落ち着き大きな声で歌え、また子どもたちの反応も良いと感じた。

ウは、歌の内容を読み取り、また想像力を働かせ内容に添ったペープサートや紙芝居を作成した。ペープサート等を作るために歌の内容をきちんと掌握したために、歌詞もハッキリとし、歌がよく伝わる発表となった。

エは、歌は導入部分の手遊びだけであったのが残念であるが、ペープサート付きの絵本の読み聞かせは、ハキハキとして良い発表であった。

オは、運動クラブ所属の学生達で、どちらかというとピアノが苦手で、リハーサルでも迷いが多くなかなか内容が決まらなかった。得意のストレッチなど運動遊びを取り入れてはどうか？と助言したところ、発表は身体を動かす事を取り入れ、しっかりとした声を出す学生も多いことから元気の良い発表となった。また、動きの変化には、ピアノの速さと同時に音の高さも変えるというレベルを高めた用い方もしていた。

S1、S2は、楽器演奏や歌唱に優れた学生のグループである。それぞれの得意分野を生かし、60名以上参加のちびっ子広場でしっかりとした発表を行った。ピアノ伴奏者は歌のリードをする学生を見ながら弾く余裕があり、リードする学生は、子どもたちの様子を見ながら臨機応変に間を取ったり繰り返しを行ったりした。

全体を観察して良かったのはどのグループもすぐに歌から始めるのではなく前奏を入れて始まっている事である。これは授業の中で注意して行っている成果と考える。また、学童保育や保育園のボランティアの仕事をしている学生に、もの怖じせずハキハキと話せる者が多かったのも大きな特徴であった。

(2) 課題

まず課題として挙げられるのは、年齢による発達段階が分かっていたことである。リハーサルでは、2～3歳の子どもではできない動きを考えたり、年齢に無理のある絵本を準備したりしていた。

他の科目で学習した事に関連づけて考えるという力がまだ付いていないということでもある。また、やる気とはうらはらに準備不足が目立った。リハーサルや本番前の練習ではあまりミスがなかった絵本読みやピアノ演奏が、本番では多くのミスが生じたのは、緊張だけではなく準備不足や経験不足と考えられる。全体に声が小さい発表も課題である。子どもたちの集中を途切れさせないためには、明確に子どもたちにしっかりと伝わる声での発表が必要であるが、声は聞こえるが小さい、という発表が多かった。ピアノに関しては、弾くことだけで精一杯となり、子どもたちやリードをする学生を見る余裕のない学生が多かった。表情がかたく笑顔も見られず緊張が伝わってくることもあった。また、子どもたちに合わせたテンポで弾くことができず、自分の弾ける一定のテンポで弾いてしまう学生がほとんどであった。

D-10グループ (つどい)



D-4グループ (つどい)



D-6グループ (ちびっこ)



C-1グループ (つどい)



D-2グループ (つどい)



3. 学生アンケート

保育の現場において音楽を伴った場合、子どもに対して良い環境を作り上げるにはいかなる能力が重要であろうか。ここでは、学生アンケートの結果をもとに、保育現場で求められる音楽的能力について考えるとともに、これまでの授業で学生が獲得した力と、これからさらに獲得すべき力を明らかにしたい。

3.1 学生アンケート

今回の実践にあたり、配布した記録シートには「実践後の記入欄」として、内容・指導の仕方、子ども達の様子等に関する〈よかった点〉〈改善点〉、実践後の〈感想〉を記入するアンケート欄を設けている。それぞれの活動後に記入させ、学生に振り返りを促した。表2ではアンケート

表2 学生アンケートのポイント

学生アンケートのポイント まとめ			
子どもの反応	構成	年齢設定	進行
小道具	話し方	緊張	準備
発表の出来	音楽		

から抽出した学生達の主な視点を挙げている。単なる個人的な感想に終止せず具体的なポイントに絞って反省する等、丁寧な記述が多く、全ての設問に全員の回答があったことから、学生達がこの実践に対して意欲をもって取り組み、有意義に感じていることがうかがえた。

3.2 音楽に関するコメント

また、学生アンケートの中で、音楽に関するコメントをまとめたものが表3である。

表3 音楽に関するコメント

音楽に関するコメント まとめ				
項目	要点	回答数	小計	合計
良かった点	・子どもたちの反応が良かった ・進行、自分の表現が上手くいった	4 3	7	47
改善点	・もっと練習すればよかった(ピアノ・楽器・うた)	6	23	
	・ピアノを間違えた、失敗した	5		
	・テンポに関する反省(テンポキープ、速過ぎた、速度のバリエーション等)	4		
	・子どもの様子を見ながら(コミュニケーションをとりながら)ピアノが弾けない	3		
	・その他	5		
感想	・緊張でピアノが弾けなかった	3	17	
	・もっと上手になりたい、練習を頑張りたい	3		
	・子どもの様子を見ながら(コミュニケーションをとりながら)ピアノが弾けない	3		
	・練習不足、余裕がなかった	3		
	・その他	5		

この結果、学生の反省が多く、注目すべきだと感じられたのは以下の点である。

- ・ピアノが上手く弾けなかった

- ・練習（準備）の大切さに気付いた
- ・テンポに関する反省
- ・子どもの様子を見たり、コミュニケーションをとりながらの演奏が出来ない

以上のアンケート結果をもとに、本学の保育士を目指す学生に求められる音楽的能力について考える。

3.3 考察

保育の現場において、音楽を用いて子どもたちに「環境の場」を設定することとは、子どもが心地よく音を感じ、自由に感受性や想像力・表現力を育むことが出来るよう、その場に相応しい音を提供することである。そのため、音楽を担当する者は、質の高い演奏・活動を妨げない自然な流れ・子どもの状況に応じた臨機応変な演奏に努めなければならない。また、演奏法や選曲の知識を増やし、音楽のバリエーションを広げるよう心がけることも必要である。

今回学生が実施したプログラムは、歌+ピアノ・動き+ピアノ・物語+ピアノの組み合わせが中心である。学生アンケートでは、ピアノ演奏の難しさ・子どもに対応した適切な音楽表現に対する不安が多くみられた。具体的には、(1) ミスの無い演奏 (2) テンポ (3) 演奏中の子どもとのかかわり (4) 選曲に多くの学生が関心を持ち、問題を感じている。これらは保育における音楽で非常に重要な要素であり、教員は改善のための指導に努めなければならない。

(1) ミスの無い演奏

失敗の無い演奏は音楽の流れや情緒を作り、保育活動もスムーズに進行することが出来る。逆にただただしい演奏をしたり、演奏中に止まってしまったりするようでは、音楽を通じ子どもの表現力や感受性を育てることは難しい。学生アンケートでも、ピアノが上手く弾けなかったといったコメントが多くみられ、今回の経験を通して失敗の多い演奏が活動の妨げになる事を実感したと思われる。また、もっと練習をすれば良かった等、練習の大切さを感じた学生も多かった。ピアノ演奏は身体と道具を使って行うため、ミス無くすらすらと演奏するためには、時間をかけてピアノの鍵盤に慣れ、運指が無意識でも行えるほど、何度も繰り返し練習しなければならない。また緊張感からの失敗には、人前での発表を重ね、場慣れするのが効果的である。「楽譜の理解」や「効率のよい演奏法の研究」に比べ軽視しがちであるが「慣れ」もまたピアノ上達の重要な鍵である。本学の一年次は楽理の学習と平行しながら学生個々のレベルに合わせて多くの曲数を身につけていくことを目指すカリキュラムであるため、学生は一曲毎にかける練習時間が少ない傾向にある。そうした学生は、曲への理解や楽譜を読むこともいづらか向上し何度か弾けるようになるとすぐにその曲への練習を終えてしまいがちであり、時間をかけて弾き込む事の重要性に気が付いていないのが実情である。アンケートでの気づきが無駄にならないよう、口頭の指導だけでなく、何度弾いても納得のいく演奏が出来るまで、じっくりと時間をかけて取り組む機会が必要であると考えている。

(2) テンポ

楽曲にはそれぞれ相応しいテンポといったものが存在するが、保育現場では速度を変化させることで、運動をコントロールしたり、歌詞や物語の意味合いを強調したりすることが多い。また、子どもの動きや歌声に合わせるため、微妙な速度の調整力が必要となってくる。学生は授業で行進曲や子守唄等のリ

リズム曲を学習しているため、アンケートでも挙げられているように、テンポに対しての意識は高い。しかしながら、学生の多くは、ひとりよがりなイメージをもとにした速度となってしまう、現場の状況とは合っていない演奏をしがちである。ペアやグループを組み、他人の動きや歌に合わせて演奏する練習を取り入れる必要があるであろう。

(3) 演奏中の子どもとのかかわり

音楽を通じて子どもと深く関わるためには、演奏中にも子どもの反応を読み取り、適切な音を作り出さなくてはならない。アンケートにおいて、子どもを見ながらピアノが弾けなかった、(演奏中)前を見て子どもとコミュニケーションを取るべきだった等のコメントが見られるように、学生達も演奏中の子どもとの関わり方に重要性を見出している。保育中は声かけをしたり、子どもの様子を確認したりしながらの音楽活動になるため、鍵盤から目を離して演奏できること、子どものペースにあわせた演奏をする調整能力が必要である。これは上記の(1)、(2)のトレーニングを重ねることで解決に近づくであろう。特に、保育中の音楽活動において、どのような視点を持ち、どのような演奏法が相応しいかは経験を踏まなければわからないため、シミュレーション演習がより効果的といえる。また、演奏時身体が固くなっていると、演奏と同時に他の動作を行ったり音楽以外の意識を持ったりすることが難しい。教員は学生に対して演奏中の脱力を促し、身体の自由な動きが可能となる演奏フォームを指導しなければならないであろう。

(4) 選曲

音楽に関するコメントには無かったものの、活動全体の反省点として、子どもの年齢に合った活動が出来なかったとの記述がアンケートには挙げられている。子どもの年齢に対し適切な保育内容を設定出来る事は、保育者の基本的な必要要件であるが、音楽についても同様である。具体的には、子どもの年齢に合わせて、歌、リズム、音楽の持つ印象等を考慮し、使用する楽曲を選択する必要があるといえる。学生は、子どもの成長に照らし合わせて歌詞やリズムを検討し、それぞれの童謡について対象年齢を確認すべきであり、また、子どもの感受性や想像力を音楽によって豊かに広げるために、活動に付随させる音楽について幅広い知識を身に付けなければならない。これらは、教員が弾き歌いの学習時に対象年齢を意識させること、多種多様な音楽を鑑賞させることで改善が図れるであろう。

3.4 まとめ

以上、学生アンケートを元に、子どもに対しより良い環境を設定する際の保育に必要な音楽的能力を求め、現時点で学生が獲得した能力と獲得すべき能力について考察した。その結果、「音楽の基礎」において、学生は一年間保育に関わる音楽を学び、保育における音楽に対しての必要な視点が養われている一方、それらを実際に表現する力が不足していることが明らかとなった。不足している能力の多くは、子どもの状況に合わせる演奏法・音楽的内容であり、普段から保育現場をイメージしながらの練習が必須である。個人練習とグループ演習の併用等、口頭の指導にとどまらず、子どもに寄り添った音楽表現を意識させるため新しいトレーニングを加えるなど、教員は改善に努めなければならない。

4. おわりに

今回の活動については、試行的なものであり、これを例年継続するかどうかは未定でスタートした。今回の活動の中から、各学生のもつ音楽的能力以外の特徴ある資質も容易に見いだすことができた。子どもたちへの関わりに十分な対応力を持つ学生が音楽的資質をも兼ね備えていることにより、この活動が有効なものとなり得ることがわかった。活動内容をより充実させるためには、学生達が対象となる子どもたちの音楽的発達に対する特性・特徴を把握しておくことが必要である。この広場では、乳児から5歳児の層が参加していたが、乳児は音を聴き響きを感じて、2～3歳児は遊びとして即興的に音に対し自由に歌い、音に合わせて歩く、走る、ジャンプするそうした身体の動きを伴う音楽に興味を示していた。4～5歳児になると、グループ活動への集団的意識があったり、音楽に対して歌ったり、様々な響きにも探究心を示していった。そうした音楽的興味や理解、共感はこの年齢に達すると大変発達していく時期となることは、以前の調査研究¹⁾でわかったことでもある。

学生達の活動が4～5歳児を対象としているとき、その内容の範囲は多様で幅広くその子どもたちに受け入れられることが可能ともなるが、この活動の場での多くは3歳児以下の子どもたちであることから、その特性・特徴への十分な知識の習得とともに、そうした年齢層に合わせた内容として計画し準備されていくことが必要と思われる。

終了後のアンケートにより、各学生は今回の活動を経験したことが自らの課題に気づく有効な機会ともなっていることがわかった。また、今後の授業内容として、個人的なピアノスキルアップに重きを置くことには変わらないが、それ以上に現場で求められる実質的な力をこれからの学習によって身につけていく必要があることもわかった。この活動の一番の収穫ともなったことは、授業内容の改善に大変有効な材料がいろいろと提供されたことにあり、今後の授業内容を検討するにあたり、この方向性を持って改善を図っていきたい。

参考文献

- 青山雅哉・小川純子・上野稲子（2012）「幼児の音楽的な発達をうながす音楽活動プログラムの開発Ⅰ」．奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行．

